社会情報学部設立 10 周年記念企画
学部長経験者 3 名による座談会

社会情報学部の歩みを振り返る

魚住清彦（2008 ～ 2009 年度社会情報学部長）
稲積宏誠（2010 ～ 2017 年度社会情報学部長）
宮川裕之（2018 年度～社会情報学部長）

清成透子（司会：社会情報学部准教授）

清成：本日は学部長経験者鼎談（ていだん）ということでお集まりいただき、ありがとうございます。社会情報学部 10 周年を迎えてのご感想をそれぞれのお方にお話しいただいた上で、そこから色々とお話しを展開していただければなと思います。どういう順番でいきましょうか。やはり初代の魚住先生からでよろしいでしょうか。

社会情報学部の誕生

魚住：私は 2004 年 12 月からの武藤元昭学長のもとで新設学部をつくるという仕事を任された副学長の一人でした。杉浦勢至副学長が青山キャンパスの総合文化政策学部、私が相模原キャンパスの社会情報学部を担当しました。

当時、経営学部と経済学部の二部を廃止することが検討されていました。二部の定員だと 600 名ぐらいありました。それを財政的にも補完するためには、新しい学部を作る必要があるということで経営学部と経済学部が最初検討していました。半田正夫学長の時代に、いろいろ案は出ていましたが、なかなか決まるとこまでいかずに武藤執行部に引き継がれたのです。

武藤執行部になって一番大きな条件の変化は、2003 年に理工学部が今はもう無い世田谷キャンパスから相模原キャンパスに移ったことでした。それで相模原キャンパスは文理融合キャンパスだという。理工学部があって、文系の 1、2 年生がいるから文理融合というのはちょっとおかしいというのが、私の頭の中にありました。文理融合っていうぐらいなら、それにふさわしい学部があってしかるべきと思っていました。

当時は学長の権限は限られていて、全学部の賛同を得ないと新しい学部はできませんでした。武藤執行部で案を出してもどこかの学部で否決されてしまう。私たち執行部は困って、理工学部に問い掛けました。相模原キャンパスに理工学部の相棒としてふさわしい学部はどういう学部か、理工学部はどう考えるかを打診しました。当時、私の後を引き継いで、稲積先生が理工学部長をされていました。理工学部でいろいろ練っていただいたら幾つか案が出てきて、その中の一つに社会情報学部がありました。

当時、武藤学長が委員長の新設学部設立準備委員会が全学的には組織されていました。そこで理工学部からの案も検討して、その委員会としては、社会情報学部がふさわしいだろうということで、全教授会に諮られました。ところが、なかなか承認を得られなかった。未承認の学部があったのに 2007 年の学部新設の改組の届け出の期限が迫っていました。でも 2007 年 4 月に届出申請をして最終的には全学部の承認を得て学部ができました。

稲積：そもそも魚住先生は社会情報学部の案が出る前に副学長として検討しておられて、具体的な案は提案しましたよね。今から思うと、魚住先生の中では相当具体化された案が実はできていた。

魚住：そうです。人選も進めていました。

宮川：そうですか。

稲積：環境福祉ですよね。

魚住：そう、健康福祉を一つの核にしようと考えました。しかし、最終的には新設学部設立準備委員会で理工学部から提案していただいた社会情報学部が執行部としても一番適切だろうという判断をして、設置すべく学部長会に諮ったのです。

思いますに私が前に考えた学部は、全部新しいいわばゼロからのスタートで大変だったのです。社会情報学部は読み書きそろばんの、特にそろばんのほうを担当する理工学部の小池和彦先生、矢野公一先生が加わってくださり、国政経 OB で国際マネジメント研究科の清水康司先生も遠方から……遠方っていうのは、ご自宅が遠方にあったんですけども参加してくださいました。それと青学の OB の先生方ですね、理工学部の OB の飯島泰裕先生、宮川裕之先生、短大にいらした宮治裕先生、そういう方々に声を掛けて、中心になる人を集めてスタートしました。

こうして学部ができてスタートしたとき、私の役目は 8 割、9 割終わったという気分になりました。あとは学部の中心になって活躍する方にバトンタッチしたいって思いでした。なぜならば私は物理学専攻で、やはり社会情報学部の何たるかってことに関しては、頭で考えるともちろん素晴らしいと思うのですが、自分の専門を考えるとちょっと縁遠かったものですから。読み書きそろばんの中の数学の先生方と一緒にそろばんのほうの教育に徹しようっていうことで、基礎数学の授業を担当しました。それから社会情報演習が当時 1 年生からありましたが、そこで文献を調べて自分の考えをまとめて発表するという授業を担当し、私も社会情報学部に少し入り込めた気がしました。

やはり学部長としては、学部を立ち上げたときに学部の居場所がないことが問題でした。稲積先生、ご存じですか。自分の居る部屋はあるのですが……。

稲積：その気持ち、じゅうぶんわかってます。

魚住：そこに一番苦労しましたね。できる前からそれはもうわあわあ騒いで、伊藤定良学長と岡田昌志副学長に一生懸命かけあって、絶対必要なのでＢ棟につくってくださいとか、Ｏ棟の実験室つぶしてつくってくださいとか、お願いしました。最終的には 2 年次を迎えるに当たってＯ棟に演習室をつくっていただきました。

こうして学生にとってのインフラが整った気がしましたが、特に理工系からいらした先生方に必要な、大学院生や学生の居場所がある研究室は整えられませんでした。これらは積み残しとして次の稲積学部長にバトンタッチしますが、その辺に一番苦労しました。それともう一つは文系と理系の先生方の研究スタイルの違いです。学生とともに研究を進めるのが文系の先生方とは基本的に違うところが有ります。

宮川：そうですね。

魚住：事務の方も青山キャンパスの方が多いですから、何でそんな部屋が必要で、演習室つくったらそれで十分じゃないかみたいなことで、なかなか大変でした。

稲積：ええ。

魚住:それでも学部がうまく立ち上がったのは、何といっても理工学部から、稲積先生を核にされた社会情報学部という提案をいただき、しかも一緒に学内の教員の方も来てくださったっていうことが一番大きな理由じゃないでしょうか。その後、稲積先生が学部長を引き継がれたのは、むべなる

かなっていう気がします。

理工学部改革から社会情報学部へ

清成:どうですか、今のお話をお聞きになって。

稲積：いやいや、長過ぎたっていう批判もあるので恐縮します。

清成：任期が、ですか？

稲積：そうですね。思い出すと、できるまでの話で言うと、本当に魚住先生が頑張って提案してるのに、いろいろな学部がとても冷たかったんですよね。それって青学で作る学部ではない、悪く言うとお高くとまってるようなところがあったかなっていう印象ありましたね。冷たかったですよ、そういう意味からすると。

宮川：全学部とも。

稲積:いや、全学部とまではいかないけれども、消極的賛成は一部あったものの、どちらかというと否定的な空気がやっぱり強かったですね。僕は、本音ベースでいくと、理工学部の改革をしたかったんですよね。歴史的に、理工学部は「重たい系」いわゆる実験系の、それこそ魚住先生の物理・化学、電気、機械などの分野が中心だったじゃないですか。でも、いわゆる「ソフト」系のところを含めて、既存の学問領域に捉われないような再編をしないと、これから難しいんじゃないかということがありました。つまり、理工学部長になった時から理工学部自身も変わんなきゃっていうふうに思っていて、新学部の問題を考えるなら、理工学部も一挙に変えちゃおう、理工学部を解体して再編して、そのなかに学際的な新学部をつくろうと思ったんですよ。だから本当は理工学部が２つに分かれることによって、当時の理工学部の基幹部分と、今の社会情報学部のもうちょっと理系寄りの学部と、今の社会情報学部のもうちょっと文系寄りの学部、こういう３つのウイングを張るようなイメージを持っていました。理工学部も改組を同時並行的にやるっていうのが目標だったんです。

宮川：当初はそういう考えもあったのですね

稲積：もちろん。ただそのことで、相当たたかれましたよ。

宮川：そうでしょうね。

稲積：だって、自分たちの既得権益を損なう提案をしようとするわけだから。やはり、理工は人の面も金銭面でも優遇されますからね。これが文理融合みたいなところに行ったら、どうなるかわかりません。やはり理工学部というレッテルがなくなるのは不安なわけですよ。

文理融合という場合には、必ず情報系がその対象になりますが、そこに積極的に取り組んで、文系の人たちと一緒にやろうということにはなかなかなれないということが本当によくわかりました。たしかに、文理融合の学部は、ほとんどが旧教養課程からの改組とか、限られた選択肢の中であって、積極的につくられたものは少ないですから。最初は私も、理工学部を辞めるって決めてたわけじゃないんだけど、当時の理工学部の枠組みを変えられないなら自分が出ちゃって文理融合を指向する方が早いやって思っていました。今から思うと既存の組織を変えるのは難しかったかもしれません。やるとしたら時間がかかる。だからそこは諦めて新しい学部の構想を考えたわけです。

学部創設メンバーのこと

もう 20 年ほど前、OR 学会の大会を青山キャンパスでやることになったんです。そのときに当時博士課程にいた清水康司先生と一緒に手伝っていましたが、僕もまだ 30 代から 40 ぐらいの若い頃だったから、彼と結構いろいろな話をしました。彼が英語の教職免許を持っていて、英語の教育実習のときに高等部で教えた教え子というのが僕の研究室にいたりとか、偶然の出会いもありました。そんな縁もあって学部をつくるにあたって、清水先生、それと宮川先生もよくご存知の A 先生な

んかにも、声を掛けたのですよ。

宮川：そうですか。

稲積：清水先生は国際マネジメント研究科に移ったんだけど、あそこは社会人向けでしょ。でも、彼、やっぱり学部生と一緒にやりたいんだということを言ってるというのを聞き付けて。それで、彼と会って、「やっぱり学部生相手の教育が大切だよね」とか「今度新しい学部つくること考えてるんだけどさ、どうかな」って言って仲間に入ってもらったんです。

清水先生が亡くなったときにも話したんだけど、彼がそこのタイミングで移ってきてくれたことは本当にこの学部にとって大きかったんです。やはり国際政治経済学部の初期メンバーはみんな優秀なわけですよ。しかも高等部からの生え抜きだし、そういう彼が敢えて移籍を受けてくれたっていうのは、理工学部の矢野先生や小池先生も思いきってくれたとはいえ、学部をつくるにあたっては何よりも大きかったわけですよ。じつは何人かには断られましたけどね。

宮川：そうだったんですか。

稲積：立ち上げのときに一番印象に残ってるのは、やっぱりそこですよね。あと、今日も必ず来たら紹介しなきゃいけないなと思うのは、増永良文[1]先生が加わってくれたことかな。とにかく増永先生めちゃくちゃ面白かったのは、就任式のときか何かで、大勢の人が集まっているときに、新規任用者の代表ということであいさつを、っていうことになったわけです。まだ学部が正式に認められていないときです。みんなほとんど知らない中で増永先生が、まだ出来上がる前なのに、「社会情報学部。社会情報学部は素晴らしいんだ」ということを滔々とぶち上げるわけよ。周りの人から「稲積さん、あれ誰」とかって言って、「いやいや、いやいや、今度着任された、ミスターデータベースっていうふうに言われてるんですけどね」とか何とかって言って、笑ってごまかしたことがありました。そういう、やみくもにとにかくアクセル踏んでがーって突っ走るようなガッツのある人がいたりとか。

それからやっぱり、英語は――これもいろんなとこで書いてるけど――会津でいろいろやってた鬼軍曹ね。ああいうパワーのある人たちに、頼み込んで、来てもらったことですね。村川久子[2]先生とは忘れもしない御茶ノ水にある山の上ホテルでお会いして、滔々と彼女の英語論みたいなことをお聞きして。しゃべる量は、僕も結構しゃべり始めたらしゃべるんだけど、1対9ぐらいの比で村川先生の話を聞いて、じゃ、賭けてみるかと思った。そういう立ち上げのいろいろなことを思い出しますよね。10年たつと。

そうそう、宮川先生への口説きは、「卒業生だったら絶対働くだろう、働くに決まってるんだから」なんていうこと言いましたよね。

宮川：恐ろしい。

稲積：清水先生にも、やっぱり卒業生で誰が推せるか、ということで、石田博之先生を紹介してもらったりとか、仙波憲一[3]先生にも副学長として結構後方で支援、サポートしてもらいました。外で苦労した経験のある人っていうリクエストで長橋透先生をはじめ、いろいろな人を紹介してくれました。石田先生なんか、初対面の印象があまり良くなくて、清水先生に言ったのよ。「清水先生、彼本当にやる気あるの」って。そうすると、「先生、石田君、絶対信頼できますから」って。

魚住：言われて思い出したよ。評価は厳しかったかもしれません。

稲積：でも結局、いまにして思えば地味で浮ついたところのない、清水先生の言うように本当に

1　2013年3月退職

2　2014年3月退職

3　地球社会共生学部教授、前青山学院大学学長

信頼できる男でしたね。

魚住：それと１つ大事なこと言い忘れてたんですが、佐伯胖先生に中に入っていただいたっていうのは、私にとっては因縁です。青学では各学部の上に大学院があるのに、独立大学院のヒューマン・イノベーション研究科をつくろうという動きを佐伯先生がされて、理事会がすごい乗り気になって、大学執行部に作るよう働きかけてきたのです。ところが先ほど言ったとおり、つくるためには学部の教授会の総意を得なくちゃいけないってことで、私は一生懸命頑張ったのですが、どだい無理な要求だったわけです。

稲積：たしかに困ってましたよね、

魚住：社会情報学部の設置を改組届け出で申請するためには、学内の教員もある程度人数をそろえておくことが非常に大事なことでした。もちろん稲積さんや清水先生も来てくださるのですが、ちょうど佐伯胖先生がご定年になる直前だったので、加わっていただき、人間をキーワードにして苅宿俊文先生を引っ張ってきていただいた。私にとっては最初の新入生歓迎会のビタハピ[4]っていうのは私にとってもショッキングな行事でした

次の 10 年に向けて

清成：それでは、宮川先生、今のお話を受けてどうですか。

宮川：僕は立ち上げの最初のところは分からないから何とも言えないんですけど、やっぱり融合系学部って、どうやったら活性化していくのかっていうことが、最大の課題かなと思ってます。立ち上げっていうのは、まず立ち上げようっていう目標が明確じゃないですか。だから、そこに向けて持てる力を振り絞るってことでいいと思うんですけど。10 年たって、今までつくってきた社会情報学部のシステムにだんだんみんな慣れてきて、まあこのままでいいじゃんっていう雰囲気が徐々に生まれてくる頃なんじゃないかなと思うんですね。だけど、社会情報学部が背負ってる宿命みたいなもんで、この学部はカリキュラムにせよ、人材育成のいろんなやり方にせよ、変わっていくってことを求められているんじゃないかと思います。変わらないほうがいい部分ももちろんあるんだけれども、改革していく、チャレンジしていくっていう気持ちをずっと持ち続けることはできるんだろうかっていうのが、一番の今の課題かもしれないですね。次のステップに向けてのスタートラインに今立っているのかなと思っています。今われわれがコンセプトにしている３つの領域と融合領域の３つのコースも、卒業生の声も参考にしながら、変えていく必要があるんだったらどんどん変えていく姿勢を持つことが大切だと思いますね。

魚住：学部として情報があらわに出ている学部が一つ大学としては必要だと思っています。そのところはぜひ強くしていただきたい。特に社会との関わりの情報ね。5G の世代で IoT の世界になったときに、それをどう使うかが非常に重要になります。そこが私はこれからの社会情報学部が先頭を切って引っ張っていける部分じゃないのかなって気がしています。

宮川：全く同感です。他の工業分野の進化と全く同じように情報化についても、世の中に浸透していけばいくほど、今、魚住先生がおっしゃった活用面が次第にクローズアップされていくのだと思います。technology push の発想だけではなく、demand pull の発想も必要になってくる。情報化によって価値が生み出される社会や人間も情報と一緒に扱っている社会情報学部は時代の最先端を走ってると思っています。ただ、とにかく高校生に説明するのが非常にややこしい学部で、何かう

---

[4] 苅宿俊文教授が開発したハッピ型のコミュニケーションツールをつかったワークショップ。社会情報学部では設置初年度から新入生を対象に実施している。

まい方法がないかなと最近思ってます。

魚住：そうですか。でも、例えば今、最近高校生にだってスマホがもう完全に普及しているわけでしょう。そしたらスマホで何でもできるって、これはどういうことかを考えて貰う。社会のシステムが今そこですべて動こうとしています。

稲積：ぼくも宮川先生に同感。今極端に言うと、文系の学生は数ⅡＢとか数Ⅲは一切やらないし、物理も化学もほとんどやらない。理系の学生は例えば歴史とか何とかってほとんど勉強しない。もうそういうふうな構造じゃないですか。そのときに、社会情報学部は、いわゆる国立タイプであれば比較的注目してくれるんじゃないかって。たとえば、関西は国立志向が結構強いから、同志社とか関学の同様の学部っていうのは結構善戦できるけど、首都圏、関東の場合には、やはり国立志向もあるにはあるけれども、やっぱり私立文系、私立理系、特に私立文系っていう大きな市場があって、そこを切り崩さないとわれわれ生き延びれない。でも、はなから学生たちは文系・理系って大学を切り分けちゃう。そのときに、じゃあこの学部は何って、文系なんですか、理系なんですかっていう、はっきり言えば、ほとんど意味のないところから説明しなきゃいけないっていうのが最大のネック。「あのさ、そんなこと関係ないんだよ」「そんなことじゃないだろう」って言いたいけどね。

宮川：そうなんですよ。関係ないんだよと言っても、受験生は受験対策をしなきゃいけない。受験対策は、完全に理系と文系と分かれているという状況の中でどうやって、どの層のどんなマインドセット持った高校生に、どういう訴求をしたらいいのかっていうのが知恵の出しどころだなと思います。

稲積：もう一つはやっぱり、中にいるわれわれ自身が、ほんとにそのコンセプトを自分のものとしているかっていうことが、あらためて問われますもんね。

宮川：それはそのとおりですね。学生には融合、融合って叫んでる教員の方が融合していないのでは話が始まらないですね。

稲積：ただ、この間、松澤芳昭先生と話してて、卒研の発表会とか必ず多領域で一緒にやると、それはすごいことですよねって、彼が言うわけ。そうなんだよね。結局、最初からそういうふうにやろうとしたから、みんな何となく無意識のうちに一応それがデフォルトかなって感じになってる。でもそうやって垣根を取っ払うっていうことそのものは画期的なことだと僕は思っていて、ある意味でそこのところは自画自賛してもいいかなっては思うんだけど、ほんとはもう一歩二歩踏み込んだ取り組みが求められますよね。

宮川：次の 10 年のテーマですね。

清成：まさにそういうお話になったところで、これから 10 年、社会情報学部はどうなってほしい、ということをお話していただければ。今後 10 年間を見据えて社会情報学部にどうなってほしいのか、先生方が今現在思われている熱い思いをお聞かせいただければと思います。

魚住：AI がこれからどう進んでいくのかが気になります。AI を研究する学部はどこでしょうか。コンピューターに関連する学部は AI を研究しているのですか。

稲積：今の AI の基盤のところで言うと、その中心は機械学習なんで、そこはやっぱり情報プロパーのところが押さえてると思います。でも、その周辺はすごく多様じゃないですかね。機械学習を使ったアプローチは、もう誰でも使える技術になりつつあるから、AI の基盤技術をある程度理解したうえで何をするかが重要でしょう。

魚住：AI が進んでいくと、例えば今の銀行、投資とか、そういうものがどうなっていくのかなっていうのがすごく不思議です。今はもう株の取引などはコンピューターが瞬時を争って処理し

ている。正確には知らないで申し上げているのですが、その辺をAIが考えて判断するのが進んじゃうと、人間は何をするのだろうかと思います。AIが機能して、インターネットのIoTでロボットをはじめとした全てが遠隔で動いちゃう。そうすると、人間はどこで何を考えてやるのか。AIの世界が将来的にどうなるのかっていうことを社会情報学部で考えてほしいと思います。未来の人間とAIとがどういう付き合い方になるのかということを。

稲積：ただ今の機械学習ベースのAIって結局データありきなので、事例の蓄積のない世界に対しては、AIは非力なわけですよ。囲碁が何か強くなったっていうのはAIの進歩は進歩なんだけど、今までだったら、これって非常識だよねみたいな事例は結構ネグらざるを得なかったのが、そういった事例も全部学習対象になって、学習する量が従来とは桁違いに多いので、強くなる。

魚住：コンピューターでなければ出てこないような新たな手が出てきてるってわけね。稲積先生が今言った流れでそういう手が出てきてるのか。

稲積：今までだったらこんな手あり得ないよねっていうふうに無視されてたような手も事例として加わっていくことで強くなる。

魚住：いや、そこならばいいんだけどね。そういうこと重ねていくうちに、AIが人間の創造活動に相当する部分に入り込んでくるのではないでしょうか。ホーキング博士なんかはそれをすごく心配していて、人類はAIで滅びるのではないかって言っています。

稲積：AIのメカニズム、今だったら機械学習のメカニズムを知らないのに、過度にそれを偏重してしまう状況が生まれると、AIに使われる形になっちゃう気がしますけど。

宮川：自分の出身学科の経営工学が生産管理というところからスタートしたときは、まだまだ研究室での技術開発や生産管理の手法の開発が最先端だった時代で、工場にそれを導入することで発展したんですよ。いろんな研究成果が望まれていたんですね。

ところが、それがだんだんと技術が進歩して普及して、一般の企業が生産管理を工場の中で実施できるようになってくると、現場を持ってるところが強くなっていきます。工場という現場を持っている企業に生産管理の技術などが蓄積されていくようになった。稲積先生おっしゃったように、データの蓄積によってAIの進歩があるなら、データを持ってる企業に研究の重点が移っていく可能性がある。社会情報学部の今後の10年を考えるときに、情報化の進展の行方を片目で見ながら、どのような研究教育の方向性にすることで社会に貢献できるのかを考えていかなきゃいけないと思ったりもします。

稲積：経営工学しかりなんだけど、学際領域として何が今求められてるのかを考えながら、自分の持ってる基盤技術をどう展開してくのかということに注力するようなグループがいてもいい。自己否定的になっちゃうかもしれないんだけど、社会情報学部も時代とともにフォーカスする領域をずっと変化させ続けなきゃいけないってのは、まさにそういうことだと思うんだよね。だけど、根っこに何を持って変化に対応していこうとするのか、ここのコンセンサスだけがやっぱりポイントで、そこどうするかだよね。

宮川：そうですね。学術的に根っこの部分を体系化してくっていうのはすごく時間のかかることなので、それが完成したら社会情報学部の未来を考えましょうっていったら、たぶんもう、そのころはいなくなっている。

稲積：そうすると、言い古されているんだけど、我々のやろうとしていることは大学院の仕事じゃないのっていうことになる。学部のときに基盤となるものを身に付けてから、これだけで物事が解決されるわけじゃない、もっと広く見ていかない

と社会に内在するようないろんな課題解決にはつなげていけないということで、さらに何をやればいいのかって考えていく。そこまで学部でやるのか、学部ではある程度要素技術、基盤技術を身に付けた上で、大学院でさらに上位のところに展開しようとする人たちを相手にしてっていう形にするのか、ここが結構悩みどころ……。でも僕らは学部ということを選択したわけだから、そこでいかざるを得ないんだけどね。

相模原キャンパスのこれから

清成：相模原キャンパスに 2019 年度から新しくコミュニティ人間科学部ができますよね。そのことも含めて相模原キャンパスのこれからについて何か思うところがあれば。

魚住：私は理工学部出身で、理工学部が相模原に移転したときに学部長をしていました。稲積さんは反対されたんですけどね。世田谷キャンパスからの引っ越しの時は私が理工学部長で、大変な作業をしてとにかく理工学部が移りました。さきほど申し上げたように文理融合学部にふさわしい相模原キャンパスを作り上げるには社会情報学部に加えて新しい学部が必要です。

社会情報学部の立ち上げ当時は文系の１，２年生でキャンパスはぱんぱんでしたが、文系 1、2 年生が青山に引き揚げると、もぬけの殻みたいになりました。その後、地球社会共生学部が 2015 年に開設しました。今度新しい学部ができますと、やっと相模原キャンパスが 4 学部体制になります。文系で 1､2 年生がいた頃のにぎわいを知っている事務の方は「やあ、まだ寂しいですよ」って言います。しかし私から見ると結構にぎやかになってきたのではと思います。新しい学部ができて完成年度を迎えたら恐らく学生ずいぶん増えて、この相模原キャンパスも一つの活力っていうのでしょうか、理工学部、社会情報学部、そしてあとの2つの学部と合わせて4学部になると､キャンパスらしいキャンパスで理工学部が元気良く活躍できる場ができるんじゃないか。私、理工学部出身なもんですからつい理工学部の話……。でもキャンパス全体としては、その 4 学部があって社会情報学部がその中で元気良くこのキャンパス引っ張るような学部になっていただきたいって強く思います。そういう意味では、私は、新しい学部ができることは大歓迎ですね。

稲積：成り立ちは別として、このキャンパスどうしていくかっていうのはほんと悩みどころですよね。ゴーストタウン化をどう防ぐかっていうのは、僕も個人的にも学部としてもいろいろ考えてみたけど、なかなか難しくって。そういう意味からすると､新しい学部が完成年度迎えると約 1,000 人増えて全体で 5000 人強になるのかな、そうするとキャンパスの活気は出てくると思うし、特に私立大学はわいわいわいわいわいわいいってるところに活力が生まれますからね。キャンパスらしく整然としてるっていうのも味わいがあっていいんだけど、そういうとこだと私学は特に活力がなかなか生まれにくいっていうふうな印象を持ってるので、新学部はプラスには働くかなって思います。

これは本質的なとこじゃないのかもしれないけれども、社会情報学部の学生ってある意味でニュートラルでいい子たちなんだけど、引きずられやすいですよね。理工学部と 2 学部体制になったときに、理工学部側にぐぐぐっとちょっと引きずられた感じがあった。地球社会共生学部ができてきて、こちら側に引きずられてると学生が言うことが多くなってきた｡そういう意味からすると、社会情報学部の学生を見ているとキャンパスの雰囲気が見えてくるんですよ。社会情報学部ってどの色にも染まる､染まれるという意味で､ポジティブに捉えるとすごくいいんだけども、ネガティブに捉えると非常に不安なんですね。

宮川：同じキャンパスに学部があったとしても、

学部間で共同で何か研究教育をやってるかっていうと、ほとんどやってないじゃないですか。近くにいるっていうだけであって、相互に連携した何かっていうのは、あまり無いようにも思いますが。

魚住：ここへきてちょうど、地球社会共生学部が完成年度を迎えますね。次の学部がまた完成年度を迎える頃に、初めてそういうことが具体的にできるようになるんじゃないですかね。

宮川：そうですね。

魚住：やっぱり新学部が発足してから４年間っていうのは大変ですよね。そんなことを考える余裕がないっていうのが正直なところでしょう。

稲積：確かに。

宮川：理工学部とはできますけどね。

魚住：理工学部とはね。

在学生に一言

清成：ありがとうございます。それでは、最後に在学生・卒業生に何か一言。

魚住：きょう無事、10周年記念事業が終わりますように。卒業生の皆さま、あるいは昔のスタッフの皆さんも教員、職員含めてお会いできるのを楽しみにしています。社会情報学部で学ばれた皆さんのご活躍を祈ります。

稲積：とにかく単一の尺度に捉われずに、みんな頑張ってほしいですね。皆、多様なところにきちんと羽ばたいてくれるといいなと思いますね。一つの物差し、一つの評価尺度では測れない多様な価値観の中で、でも自分自身の判断で志したそれぞれの領域で活躍していってほしいなとつくづく思いますね。それが、ぼくらも含めて学部にかかわるみんなのアイデンティティなのかなと思います。

宮川：社会情報学部の融合学部の特徴を生かした発想を、もっともっと前面に出してもらいたいなと思います。だから経済、経営も知ってて、情報も知ってて、統計も分かった上で、問題発見や問題解決に活かす、何かそういうところで、社会情報学部らしいねって周りの人が分かるような活動をしてもらいたいなって思います。

清成：長い時間どうもありがとうございました。

